

第七回

琉球・中国交渉史に  
関するシンポジウム

論文集

第7回 琉球・中国交渉史に関するシンポジウム

主催 沖縄県教育委員会・中国第一歴史档案館





陳 宜耘 氏



鄒 愛蓮 氏



吳 元豐 氏



赤嶺 守 氏



呂 小鮮 氏



雁 旭 氏



朱 淑媛 氏



真栄平 房昭 氏



## 第七回シンポジウムの開催にあたって

沖縄県教育委員会教育長 山内 彰

本日、「第七回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」の開催にあたり、沖縄県教育委員会を代表いたしまして、ごあいさつ申しあげます。

沖縄県は、地理的には海を隔てて中国を臨み、歴史的には一三七二年に琉球国中山王察度が明・洪武帝の招諭を受け入れて、中国に進貢してから一八七九年の廢藩置県に至るまで、およそ五百年におよぶ国家間の正式交流の歴史があります。この間、琉球は中国との冊封・進貢関係による交流のなか、一四二二年（明の永楽二十二）から一八六七年（清の同治六）までの琉球と中国との間で交わされた往復文書の原文や写し等が『歴代宝案』として編纂、保管されてきましたが、残念なことに原本の二部はすでに現在では見ることができません。

さて、沖縄県は、一九八九年から現存する影印本、写本、関連史料を校合・校訂して『歴代宝案』の編集出版を行う中で、北京の中国第一歴史檔案館には当時の琉球に関する檔案史料が多く保存されていること、これらの史料は『歴代宝案』の編集に大変役に立つことがわかりました。

本シンポジウムはこの『歴代宝案』の編集に寄与するために、一九九一年から継続している沖縄県教育委員会と

中国第一歴史檔案館との学术交流事業に基づいて開催されるものです。これまで沖縄と北京とで交互に開催し、今回は第七回目を迎えます。この交流事業によって、中琉関係史料の発掘、収集、資料の提供、編集刊行、参考人の招聘、学術シンポジウムの開催等が行われてきました。沖縄側の『歴代宝案』校訂本・訳注本、中国側の『清代中琉関係檔案選編』の各編や『清代琉球国王表奏文書選録』の刊行はこの成果といえます。これらの成果は琉球・日本・中国のみならず東アジア交渉史研究の発展に大きく貢献し、中琉歴史関係の理解に寄与しているものと信じております。

本日は、中国側からは中国第一歴史檔案館の鄒愛蓮副館長はじめ、呉元豊氏、朱淑媛女史、呂小鮮氏、雁旭氏、陳宜耘女史の六名の先生方、沖縄側から歴代宝案編集委員会委員でもある琉球大学教授の赤嶺守先生、神戸女学院大学教授の真栄平房昭先生の二名が御発表下さいます。ここに日中の研究者が一堂に会し、それぞれの専門の立場から琉球・中国交渉史に関する共通理解を深め、新たな研究成果が私たちに明らかにされるだろうと期待しております。

最後になりましたが、この機会にじっくり討論を重ね、本シンポジウムが多大の成果を収められますよう御祈念申し上げます、あいさついたします。

平成十五年（二〇〇三）十月十八日